

インド留学記

その6

博士論文の 完成から出版まで



東方学院講師
駒沢大学講師
阿部 慈 園

1

ババット・ゴーカレー両先生のお手伝いをしてしながら、南方上座部の教理綱要書である『清浄道論』(特に戒かいと頭陀ずだ)に関する論文を、ババット先生のご指導のもとに、まとめる毎日がつづきました。

しかし、八十歳を越えられた先生はときどき眼の痛みをうったえられました。眼がぐるぐるまわるともいわれました。一ヶ月、二ヶ月とわ

たくしへの指導がストップすることもありました。そのようなときは、息ぬきとばかり、北へ南へとインド国内を旅したものでした。

そして、渡印からほぼ三ヶ年を満たす一九七七(昭和五二)年の末ころ、先生は、

「ミスター・アベ、君のここでの研究はほぼ終わりに近づいたから、一時帰国して、日本で論文をまとめることにしなさい」といわれました。

帰国の準備に一ヶ月半くらいを要し、翌七八



年二月なつかしいプーナの地を後にしました。途中、研究資料のある、タイ国バンコックの国立図書館（ナショナル・ライブラリー）で、約二ヶ月調べものをし、同年三月三〇日羽田空港に降りたちました。

東京大学大学院博士課程（印度哲学科）に復

学して、両親のいる大宮の寺（興徳寺）でプーナ大学に提出する博士論文作成のための日々がつづきました。

留学以前に、博士課程における単位はほとんど履修していましたので、週一回だけ大学院の講義に足を運ぶことになりました。同期のものは、すべて学外に去っていました。気がついてみますと、わたくしは博士課程六年目（D6）^{デイラク}だったのです。三、四年若い後輩たちと机を並べることに、少しく気ははずかしさを覚えながら、講義のノートを取った日々を、今はなつかしく思い出します。

約一年間を費して、わたくしの論文は、不備の箇所を多々蔵しつつも、完成しました。英文部分は、アメリカからの留学生クック・エドガー君にネイティブ・チェックしてもらいました。完成をあたたく見守ってくれた父と母は、わがことのように喜んでくれました。

一九七九（昭和五四）年二月一八日、論文のオリジナルとコピー五部を携えて、一路インドに向けて成田の空を飛びたちました。

さて、いよいよ論文の提出というところにきて、プーナ大学事務局は、やれあの書類が足りない、やれこの証明書を持ってこいといいつて、受理を渋るのでした。最終段階にきて、

「また、これがインドか」

と思いつつ、何回も事務局に足を運びました。いく人かの助けをかりて、特に同学のシヴァクマール・シャルマ君（現サンスクリット科助教）の手をわずらわせて、やっと大学当局はわたくしの論文を受理してくれました。

三月半ばに帰国し、四月から東大でD7が始まりました。論文の審査に九ヶ月を要し、「同年一二月八日にミスター・アベの学位（PhD）

が許可された」旨の通知を、エアー・メールで知らされたのは、師走もおしつまったころでした。

ほとんど同じころ、バンダールカル研究所から、「学位授与式が明年三月に催されるが、それにあわせてプーナにやってきて、学位論文をわが研究所から出版してはどうか。ただし、出版費用はお前もちで」という手紙が届きました。父に相談しましたら、

「費用は、わしが出してやるから、行って出版してきなさい」

といってくれました。

一九八〇（昭和五五）年三月六日、成田の空は晴れあがっていました。

プーナのバンダールカル研究所は数多くの権威ある学術書を出版しており、世界にその名を

知られている研究所の一つです。所長のR・N
ダンデーカル博士が、わたくしの拙い論文を「バ
ンダーカル・オリエンタル・シリーズ」の一
冊として出版してくれるというのです。こんな
名誉なことはありません。

自らの論文が活字化され、一冊の本となる喜
びと恐^{こわ}さを交互に感じながら、また研究所の
ゲスト・ハウス暮らしが始まりました。校組で
プレス^{プレス}のE・R・ワルウエーカルおやじと、し
ばしば口論したこともありました。わたくしが
若いこともあり、おやじはすでに何十冊も校組
しているので自分の美学をわたくしに押しつけ
るのです。また、出版費用のことで、事務局長
のB・N・パランスペー氏ともみあったことも
ありました。かれは、契約した費用の三、四割
増を要求したのです。わたくしは沈黙をもって、
それに対抗しました。一時はインドでの出版を
断念しようかと思っただけでした。



はじめ「長くても半年で本になるよ」といわ
れていたのに、何と、ほぼ十月十日^{とつきとうか}を要して、
わたくしの処女作が孤々の声を挙げたのでし
た。
(つづく)